

1 ことばクリニックの挑戦Ⅰ — 2年間の変遷と新たな複数の言語聴覚士による取り組み—

○青木さつき¹, 大平 芳則², 入山満恵子², 栗崎由貴子²

(¹附属歯科診療所ことばクリニック, ²歯科衛生士学科専攻科保健言語聴覚学専攻)

【はじめに】10月にことばクリニックは開室2周年を迎えた。2年間の振り返るとともに、教員が診療に加わることで新たに可能になった、4人の言語聴覚士（以下ST）の専門分野を生かした診療体制の利点と、今後の課題について報告する。

【対象と方法】1. 平成16年10月の開室から18年9月までの2年間に来室した351名について、2年間の4期に分け、延べ患者数と紹介元の推移を調査した。2. ひとりの患者に複数のST関わった事例を通し、各STの専門分野をどのように診療に生かすことができるか検討した。

【結果と考察】1. 延べ患者総数はI期から順に、591名、726名、786名、966名と順調に伸び、中でもIV期の伸びが著しかった。専任ST1名では対応しきれず頭打ちとなっていたところへ、III期の終わりから教員STが診療

に加わったことが大きい。紹介元では、I期は演者の前任地からの継続と紹介患者が大半を占めていたが、IV期には他の医療機関と教育機関（学校、幼稚園、保育園）からの紹介が倍増した。これはことばクリニックの知名度や信頼度が上がってきたためと考えられた。2. 3通りの協力体制が可能であった。A. 患者が症状を併発している場合に2名のSTが並行して担当する。B. 1名のSTが担当していた患者を、別の専門分野の知識をもったSTが担当する時間を設け、診療内容の幅を広げる。C. 複数のSTで担当する時間を設け、意見を交換する。これによって、患者へのサービス、STのレベルがともに上がったことは言うまでもない。

【今後の課題】患者は増え続けており、教員STの協力があっても対応しきれない状況が生じている。さらなる発展へ向けての取り組みが望まれる。

2 ことばクリニックの挑戦Ⅱ —新潟市教育委員会との協力体制—

○入山満恵子¹, 大平 芳則¹, 栗崎由貴子¹, 青木さつき²

(¹歯科衛生士学科専攻科保健言語聴覚学専攻 ²附属歯科診療所 ことばクリニック)

【はじめに】今秋開室から2年を迎えたことばクリニックの来室者数は11月初旬時点で360名を越え、また新患者数は伸び続けている。その大半が発達途中の子どもであり、生活の拠点である家庭、そして学校などの教育機関との連携は、支援を継続する上で欠かせない。そこで、クリニックから積極的に新潟市教育委員会に働きかけ、外部機関との協力体制の構築を目指した今年度の活動の様子について報告する。

【連携の目的】1) 来室した多くの子どもにとって、生活の中心となる学校等での支援は不可欠であり、そのためにはクリニックでの評価・指導内容について家庭および教育機関と共通理解を持たなければ支援の意味がないため。2) ことばクリニックは一民間機関なので、ただ受身の運営では成り立たず、その機能と役割、そして専門性を理解してもらうためには自ら積極的に外部に働きか

けていく必要があるため。

【活動の様子】1) 今年度始めに室長含む2名で新潟市教育委員会を訪問、ことばクリニックの存在と現状について報告した。2) 11月には教育委員会職員がクリニックを訪問、来室者の中で19年度春に就学を迎える子どもたちについて保護者の許可の下、知能等の評価結果と言語聴覚士の視点から予測される今後の問題などについて報告し、学級種別についても協議した。特に就学については発達に遅れを持つ子どもたちの保護者の不安は強く、その思いを代弁する場ともなった。

【今後】就学以外の問題についても情報を共有し、支援の方向性を探ること、また言語聴覚士という職種の専門性を活かしてスーパーバイズ的な役割を果たせるようになることが今後の目標である。